

キャッサバ生産とフィジー伝統的農村

鹿児島大学法文学部
西村 知

はじめに

本稿は、平成 17 年度から 19 年度にフィジー共和国ビチレブ島でおこなった調査報告書である。本研究の目的は、フィジーの自給自足を中心とした血縁関係を基盤とした伝統的農村の資源利用のあり方を現地調査によって明らかにし、資本主義化された近代社会に住む日本人が人と自然との調和のとれたシステムを構築するうえでのアイデアを学ぶことである。フィジーを調査地として選択した理由は、現在も海、陸の自然からの恵みをバランスよく利用し、先住民が豊かに暮らしていること、またその基盤として先住民土地委員会 (NLTB) による血縁関係を基盤とした先住民への土地の共同所有権が確保されているからである。本研究は、海、陸を対象とした共同研究の一部であるが、著者は資源の利用を特に陸に焦点を当てておこなった。具体的にはキャッサバの生産、消費、販売を調査することによって彼らの資源利用のあり方を分析した。キャッサバは、19 世紀の半ばからフィジーにおける生産が始まった、比較的新しい作物といえるが、後述するように現在では主食の中でも最も頻繁に食されており、最も重要な現金収入源である。本稿は、調査地、ナイカワンガ村の社会経済構造を概観し、とくに NLTB の土地所有の単位である一つのマタンガリ (mataqali)、ナイロベルアにおけるキャッサバの生産、消費、販売について調査結果を紹介し、その分析をおこなう。そして、このキャッサバ生産を規定する要因を NLTB の制度とその運用、そしてフィジー固有の文化の観点から考察する。最後に、調査村からわれわれ日本人が人と自然の共生において何を学ぶことができるかを明らかにする。

1 調査地の社会経済構造

1-1 ナイカワンガ村の概況

フィジーは、2006 年現在人口が約 80 万人で、先住民フィジー系が 54.3%、インド系が 38.6% である¹。1874 年に英国の植民地となり、1970 年に独立した。現在、フィジーに住むインド系の住民の先祖の多くは英国植民地期に砂糖キビ畑の労働者としてフィジーに渡った。現在の主な産業は、観光、砂糖、衣料生産である。フィジーの経済において、フィジー系とインド系の住民は対照的である。フィジー系住民の多くは農村部に住み、自給自足的性格の強い経済を送っている。フィジーの政府統計によると、2002 年の農業生産額の 35.5%、漁業の 34% が自給自足生産である²。フィジー系のみではこの数字はさらに高くなる。インド系住民は、農業においては、砂糖キビ畑や野菜などの商品作物生産を行っている。また商業活動において支配的であり、の首都スバ市やナンディ市などの町を歩くと、ほとんどの商店はインド系所有であり、このことが実感される。

フィジーの行政区は、州 (ヤサナ: yasana)、郡 (ティキナ: tikina)、村 (ヤブサ: yavusa) に分かれている。国土の 83% のフィジーの先住民の土地は、血縁グループ、マタンガリ (mataqali) によって共同所有されている。先住民の土地は売買、譲渡が法的に認められていない。マタンガリの構成員が土地を利用する場合はリース契約を結ぶ必要がある。国レベルでは、これらの土地に関する管理、運用に関しては先住民土地委員会 (NLTB) が最高位の機関である。残りの土地は、国有地 (crown land) と売買可能な自由保有地 (freehold land) である。フィジー先住民の村は、複数のマタンガリによって構成されている。マタンガリの構成員が基本的な農地の利用に関して決定するが、実際の運用の面ではマタンガリ内のさらに下位の血縁グループが単位になっている。村の合意形成の過程で、もっとも権力を持つのが、首長 (ラトゥ: ratu) である。政府の行政とのパイク役の行政官 (トゥ

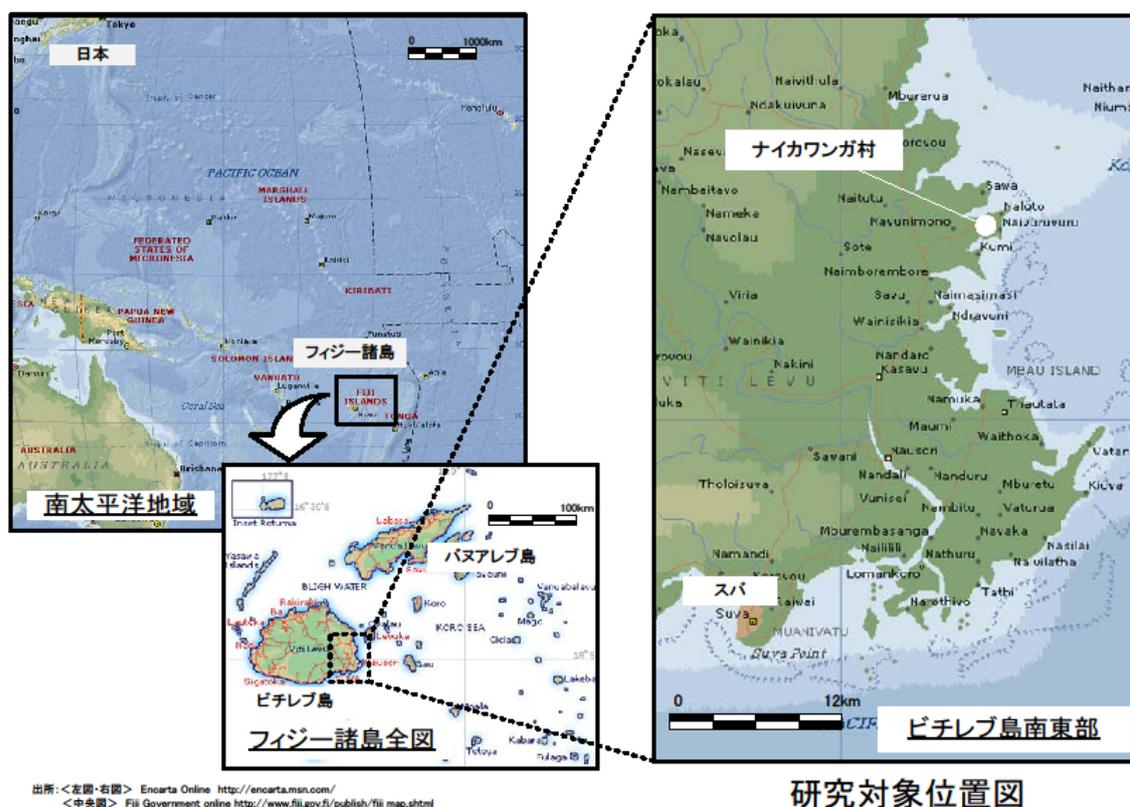
¹ 外務省ホームページ (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/fiji/data.html>)

² Fiji Islands Bureau of Statistics, Key Statistics, June 2005.

ランガ・ニ・コロ）は政府の政策を村人に伝え、村人の声を政府に伝えるという重要な役割を果たしている。

調査地のタイレブ州、ナマラ郡、ナイカワンガ村は、フィジー最大の面積、人口を持つタイレブ島の北東部に位置する（図 1 参照）。近隣には首都のスバ市や空港のあるナウソリ市がある。人口は、2006 年の村の行政官の調査によると約 190 人、世帯数は 33 である。この村は 3 つのマタンガリ、ナイロベルア、ナイランゴ、ナカウケナから構成されている。ナイロベルアはこの村の中心的存在であり、人口が最も多く、首長も行政官もこの地区に居住する。ナイカワンガ村は広大なマングローブ林に面すると同時に豊かな土地を有し、村人は海と陸から得られる自然の恵みを受けている。基本的な食糧は、村の内部で収穫されたものである。

図 1 調査地の位置



ナイカワンガ村



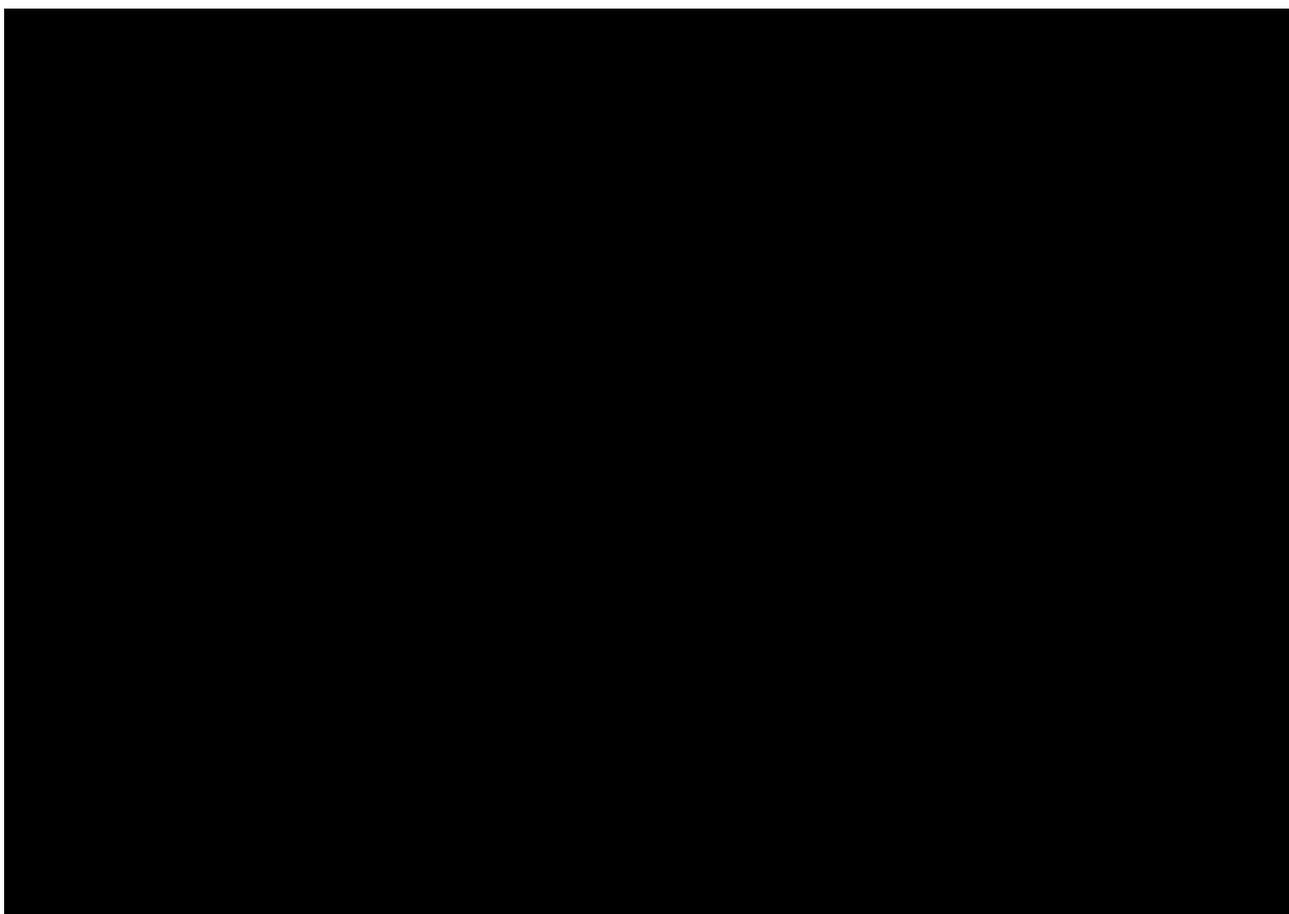
1-2 ナイカワンガ村の経済

ナイカワンガ村では、村外で働くものは例外的であり、大半は村の内部での農業または漁業をおこなっている。農業は、キャッサバ、タロ、ヤムなどの根菜類、パンの実、バナナ、マンゴ、パイナップル、アボガド、ヤシの実などの果実、ベレや青梗菜などの野菜などの栽培を行っている。表 2 は、ナイカワンガ村で生産されるおもな農産物と市場で販売する場合の価格等を示したものである。漁業は、ボラなどの魚や赤貝などの貝類、海草類を収穫している。また、ナマコを中国人商人に販売するものも多く存在する。この他にマングローブ林をはじめ村内の木材の伐採を行っている。表 1 はナイロベルアの土地に住む人々（法的土地所有者でないものも含む）に関する 27 世帯の調査結果である。表では住民を血縁関係を基準に A、B、C、D、E、X のグループに分類している。A グループは、首長およびその息子達である。B グループは、首長の兄（死去）の妻とその息子達のグループである。C（女性）は、首長と血縁関係にあるが、イトコよりもさらに疎遠である。D は C の甥の兄弟グループである。E は、マタンガリの構成員であるが、A、B、C グループ以外の人びとである。X グループはマタンガリの構成員ではないが、マタンガリ内の耕地を耕作するかもしれない漁業で生計を立てている。A グループの多くは教会や集会場、広場のある村の中心地（コロ：koro）付近に居住している。B グループの人びとは、ブワイ（Vuwai）と呼ばれる集落に住んでいる。そのほかの人びとの住居は、コロの近くまたは耕作する畑に近い場所に点在している。電気、水道はまだ通っておらず、人々は昔ながらの生活を続けている。

世帯調査結果が示すとおり、世帯主は男性の場合ほとんどが農業を中心に行っているが、漁業を行うものも多数存在する。女性は主に、貝の採集や漁業、市場における農水産物の販売を行っている。世帯数は、平均 5.8 人で 6、7 名の世帯が典型的である。世帯主の多く（13 名）は村の外での労働経験がある。ナイロベルアにおいて重要な生産手段は、漁業に用いるボートおよび林業用チェーンソーである。B グループに属する世帯番号 10 はこの両者を所有しており、ナイロベルアではもっとも豊かな住民の一人である。これらの生産手段は、B グループのブワイ集落では、共有されており、彼らに経済的豊かさを生み出す契機を与えている。これらの村の産物は基本的には村人の自家消費であるが、様々な種類の農産物、赤貝、海藻類は、ナウソリ市やスバ市で販売されて、主要な現金収入となっている。木材も村人の住居の建設用として用いられることが多いが、一部は村の外の者にも販売されている。このような村の資源を基礎とした一次産業以外に、加工食、インド人およびヨーロッパ人の食の浸透の結果、村内では入手できない食品、食材の需要が増えたために、住居の一部を用いた雑貨店が現れてきている。村の中心地のナイロベルアには、3 つの雑貨店が存在する。表 3 はこのなかで最大の雑貨店の販売商品を示したものである。村とナウソリ市、スバ市を結ぶ交通機関は、バスまたはタクシーである。バスの場合は村から

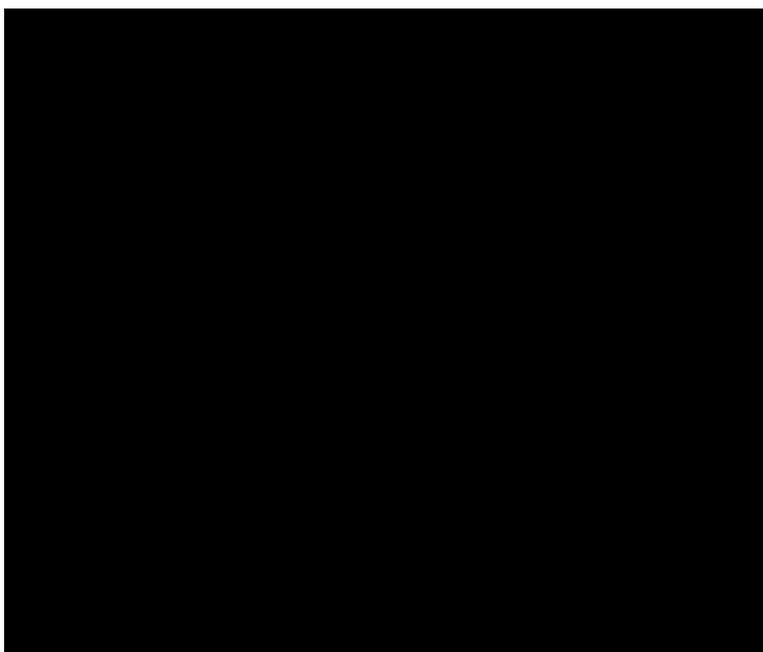
舗装されていない道路を幹線道まで徒歩で移動しなくてはならない。タクシーは村から電話を使って呼ぶ。村には、電気は通っていないが、太陽電池を使った電話が集会場に設置されており、テレホンカードを購入することによって村人が自由に使うことができる。また、少数ではあるが携帯電話を主有する村人も存在する。村における自給的一次産業以外に村の外で働くものも存在する。その一つの形態が血縁関係のある他の村において農業をする場合である。首長の息子をはじめ数人の村人はカンダブ (Kadavu) 島でヤンゴナ (yanqona) 栽培に従事している。この他に都市において建設労働、工場労働者、家政婦として非農業に一時的に従事する者も存在する。村では、月曜日に集会が不定期で開かれている。この目的は、村での問題解決のための話し合いや村に必要な物品や設備、施設建設を目的とした献金などである。現在は村に電気を引くための電線購入経費捻出が大きな課題となっている。

表 1 ナイロベルアの世帯調査



筆者作成

表 2



筆者作成 2006 年 8 月 注：1 フィジードルは約 70 円

表 3 ナイロベルアの雑貨店販売商品リスト (単位：フィジードル)

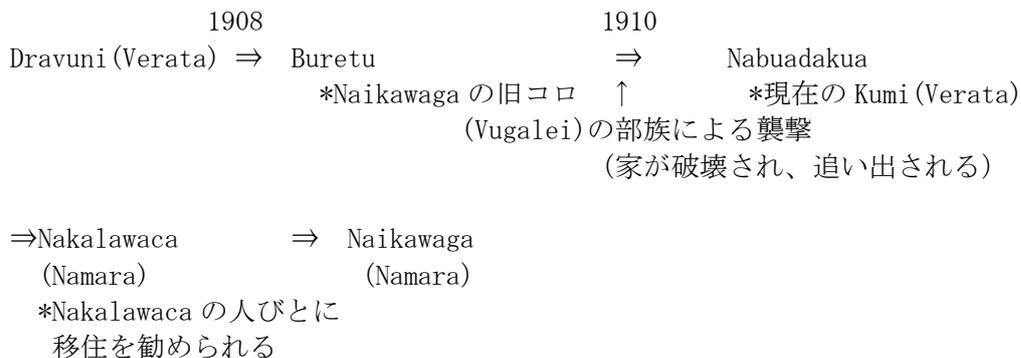
商品名		購入価格	販売価格	
雑貨店での表記	日本語訳			
1	t/fish	ツナ缶	1.6 缶	2 缶
2	tuna(small)	ツナ缶(小)	0.89 缶	1.2 缶
3	t/meat big	牛の缶詰(大)	2.59 缶	3 缶
4	t/meat small	牛の缶詰(小)	2 缶	2.5 缶
5	noodle	即席ラーメン	1.89 6個	0.6 個
6	biscuit	クラッカー	0.96 袋	1.2 袋
7	sugar	砂糖	0.88 kg	1 kg
8	dhol	レンズ豆	1.35 kg	1.6 kg
9	egg	卵	7.53 30個	0.4 個
10	yeast	イースト	3.85 袋	0.2 小さじ
11	onion	玉ねぎ	0.30~0.50 個	1.6 kg
12	b/powder	ベーキングパウダー	2.79 缶	0.2 小さじ
13	spoung	食器洗い用スポンジ	1.25 6個	0.5 個
14	w/soap	固形洗濯用洗剤	2.99 本	0.8 1/4本
15	m/coil	蚊取り線香	0.92 5個	0.3 個
16	match	マッチ	1.45 12箱	0.25 箱
17	tea	紅茶	0.89 箱	1.4 個
18	garlic	にんにく	1.87 kg(6-8片)	0.5 片
19	f/gear	釣り針	4.95 袋(80-100本)	0.15 本
20	suki	葉タバコ	2 6枚	0.5 枚
21	b/mental	ランプ用マントル	0.95 個	1.5 個
22	roll	タバコ(紙巻)	2.25 箱(10本)	0.3 本
23	salt	塩	0.67 kg	1 kg

筆者作成

ナイカワンガ村の歴史は、近隣のベラタ郡のドゥラブニ村から祖先が、現在の村に 1908 年に海路を使って移住した時から始まる (図 1、図 2 を参照)。現在、若者たちがラグビーの練習上などとして利用しているマングローブ林に面した土地、ブレット (Buretu) に村の中心 (コロ) を設けた。しかし、2 年後の 1910 年にはブンガレイ村の部族からの襲撃を受け、住居は破壊され、やはり海路を使い、ベラタ郡のナンブアンダクア村 (現在のクミ (Kumi) 村) に逃れる。その数年後、ナイカワンガの隣村のナカラワザ (Nakalawaca) 村の部族からの誘いを受けて移動した。しばらく、ナカラワザ村に居住した後、再び、ナイカ

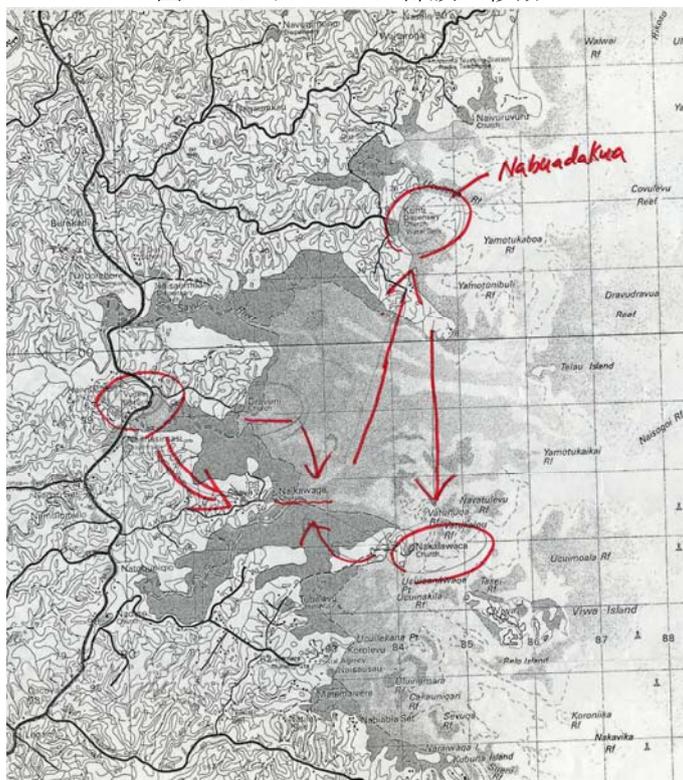
ワンガ村に戻った。そしてコロを現在の位置に設け、ナカラワザと名づけた。このナイカワンの歴史からからいえることは、かつては部族が比較的自由に移動していたこと、部族間の戦いも多かったことである。先住民委員会による土地所有権の固定は定住化を促進したと考えられる。

図 2 ナイカワンの歴史



注 土地の表記は、ヤブサ (ナマラ)。ディストリクトはすべて Tailevu。

図 3 ナイカワン部族の移動



2 ナイロベルア地区におけるキャッサバ生産構造

2-1 主食、現金収入源としてのキャッサバ

キャッサバは、フィジー先住民にとってタロと並ぶ主食である。生産量においてもナイカワンガ村においては、食卓にほぼ毎食登場するもっとも重要な主食である。フィジー政府のレポートによれば、中南米を原産とするキャッサバ 19 世紀にフィジーに導入され、1968 年には全根菜類の作付面積、50%前後となり、1990 年代半ばに 60%に上昇している³。市場は大半が国内向けであり、その生産量は同じく主食のタロの輸出増加に呼応して拡大している。政府統計によるとタロの 2000 年の生産 (35828.4 トン) は、キャッサバ (29839.9 トン) を上回るが、タロは同年に 9587 トンを輸出しており国内消費量は、262414.4 トンとなり、ほとんど輸出されていないキャッサバの消費量 (29839.9) の数値が高くなる⁴。

表 4 フィジーの根菜類の生産 単位：トン

キャッサバ	29839.9
タロ	35828.4
クマラ	6494.6
ヤム	4776.2
タロ	2356.6

(資料) フィジー政府 (2005)

2-2 キャッサバの生産地と耕作者

ナイロベルア地区におけるキャッサバの作付け図を示したものが図 4 である。全作付面積は、42.29 ヘクタールである。調査データの作付面積を使い、平均収量をヘクタール当たり 20 トン、年間収穫回数を 1.25 回と仮定⁵すると、ナイロベルアの年間生産量は 105.7 トンとなる。筆者が 2006 年に行った市場調査をもとにすると、ナイロベルア地区では、一週間当たりして、814kg のキャッサバを市場で販売している。これを年間に換算すると、 814×54.1 (年間の週の数) = 44037.4kg つまり、約 44 トンが商品化され、残りの 61.7 トンが村の中で消費されていることとなる。この数字を使うと、ナイロベルアでのキャッサバの商品化率は、41.6%である。この数字が意味するところは、現段階の研究では十分に明らかにされていないが、ナイロベルアのキャッサバ栽培を時系列に追うことによって人口や貨幣経済の浸透と農業生産との関係が浮き彫りにされるであろう。

農地の耕作面積に関しては、前述の世帯番号 10 の居住する面積が相当大きいことが見て取れる。また世帯番号 7 の世帯主の妻は隣のマタンガリの構成員であり、この世帯は二つのマタンガリにまたがって耕作している。経済的に豊かなもの、血縁関係を基盤として有利な土地利用条件にある者達を有し、一集落に住む血縁グループがマタンガリのなかで大きな政治力を用い、耕作面積の拡大を図っていることが推測される。しかし、この点を実証するためにはさらなる調査が必要である。

次に注目すべきは、法的には共同土地所有者ではない世帯が農地を耕作している点である。世帯番号 26, 27 のキョウダイは、父親が近隣のナカラワザ (Nakalawaca) 村から移住した。兄は父親の村で生まれたが弟はナイロベルアで生まれている。彼らは法的にはナイロベルアの共同土地所有者ではないがナイロベルア構成員から耕作を認められている。しかし、キャッサバ作付地で比較すると他の世帯よりもかなり小規模である。世帯番号 24 は、世帯主は他の村の出身者であるが、彼が現在耕作する農地の耕作者がニュージーランドに

³ Government of Fiji, Opportunities for the Production of Cassava in Fiji for Export, June 1998.

⁴ Fiji Islands Bureau of Statistics, Key Statistics, June 2005.

⁵ Government of Fiji, *ibid.* によればフィジーのキャッサバの生育期間は 8 ヶ月から 12 ヶ月、ヘクタール当たりの収量 20 トンである。年間 1~1.5 回収穫されることになるが、本稿ではその平均値の 1.25 回を推定値として用いた。

一時的に居住しているために同じ土地の一部を耕作することが認められている。しかしやはりキャッサバの耕作面積は小規模である。

図 4 ナイロベルアのキャッサバ作付け図



3 フィジーの伝統的農村における人と自然の共生：農地の共同所有制度と制度の可変的浸透性

ナイカワンガ村の農地の利用の第一の特徴は、NLTBの制度を柔軟に運用しその結果、格差構造は存在するものの村人が食糧不足の問題を抱えずに生活している点である。NLTBの土地制度は制度が始まった時点でその土地に住んでいた先住民に血縁関係をベースとしたグループ、マタンガリに農地の所有権を確保するものであった。しかし、フィジー先住民の移動によって村から出るもの村に入ってくるものが存在する。村から一時的に離れた者、あるいは帰村の意志のあるものは他の村に居住するマタンガリ構成員を呼び寄せるといった形で耕作を継続させている。血縁関係をベースとした緩い所有関係は労働力の移動を比較的容易にし、生産の減少を食い止めることができている。また、制度を厳密に適用していないのも特徴的である。父親がマタンガリの成員ではないためマタンガリの成員ではないが、村で生まれ、長期間居住するものは法的な共同所有権は持たないが、安定した耕作を続けているものもある。このようにナイカワンガの村人は、制度をカスタマイズしながら運用し、人々の移動に対応した生産安定化を図っているのである。このような状況は、いわば「制度の可変的浸透性」と呼ぶことができよう⁶。

村の内部での制度に関しては、分配面で機能している。その例としてあげることができるのが、タンブナニューである。これは直訳すると「禁止された椰子の実」という意味である。村人は、結婚式などのまとまった資金が必要な時に、自分が管理する椰子の木々の前に、椰子の葉っぱと椰子の実で作った標識を立てる（写真）。この標識が立てられている場合、村人はその管理者の椰子の実を収穫することが禁止されている。また、この椰子の実を触れた者には災いをもたらされると信じられている。この「タンブナ」（＝「禁止」）の標識は、他の作物にも標識の形を変えて適応される。また、ごみ捨てを禁止する「タンブナ」の標識も存在する。この標識は所有権を主張するものである

⁶ 「可変的制度の浸透性」の概念は、平成 16-18 年度科研費による研究「グローバル時代におけるフィリピン地方社会と制度」（研究代表者 西村知）から生まれたものである。

が、見方を変えると標識がない場合、つまり普段はそれほど厳密に所有権が確保されていないことを意味する。筆者は調査の途中、同行した村人がキャッサバや唐辛子の実を無断で収穫する場面に出くわした。もちろん、度が越した場合は、村の不和の原因となるようである。実際、地元の新聞、フィジータイムズ (2007 年 5 月 29 日) でキャッサバの無断収穫が原因となった殺傷事件が取り上げられている⁷。また、制度とは規定しがたいが、「貧しい人びと」を受け入れられる文化的素地が存在する。ナイカワンガ村のどのマタンガリに属しない未亡人 (世帯番号 24) が主に漁業によって生活をしているが、農産物の提供などが他の村人によって行われている。

タンブナニューの標識



そしてこれらの農業における生産、分配に関わる「共的」場がカバである。胡椒科のヤンゴナという植物の根や茎を砕き水と混ぜて布で濾した飲み物である。この飲み物は単なる嗜好品ではなく、人びとを結びつける場を提供する。マタンガリ、村のレベルでの情報提供、合意形成の際には欠かせないものである。この存在が人びとを自然にひきつけ、それが村における基本的な問題を解決するきっかけとなるのである。

⁷ <http://www.fijitimes.com/story.aspx?id=63514>



カバ

おわりに—フィジー—伝統的農村から何を学ぶか—

本報告の目的は自然と人びとがバランスよく調和するフィジーの自給自足的な性格の強い伝統的農村におけるキャッサバの生産、分配の現状を紹介することによって、商品経済化された社会に住むわれわれが人と自然の共生のありかたに対して何かを学び取ることである。ナイカワンガでは、NLTBの制度を可變的に運用することによって自然資源を村人が有効に利用してきた（外部者の受け入れ、タンブナニュー）。そしてこの制度の可變的浸透性⁸を可能としたのが様々な生活の場で欠かせないカバというフィジー特有の文化であった。

現代人が人と自然との共生に関してフィジー、ナイカワンガから学ぶことができるのは地縁を基礎とした人びとの可變的浸透性を可能とする制度の構築と合意の場の形成であろう。様々な世代、職業、価値観を持つ人々を一定の方向（行動）に導くための制度、またその制度が運用されるための場である。この「場」は新しく作るべきものあるいはその地域にもともとあった普通の多くの人びとが集まる場（例えば公民館、運動会、祭）の活性化、再生化によって生まれてくるであろう。

複数の異なる存在、グループがお互いの持つ豊かさを相互に増幅させていくことは容易ではない。しかし、限られた身近な土地、水、空気などの自然資源を「自然に」共有する地域住民が、自らの生活を守るために共同の、共通のアクションを起こす、あるいはそうせざるをえないことはしごく当然のことである。しかし、多様性を進化させていく人々を一定の方向に向かわせるためには制度と合意形成の場が必要となろう。ナンシーは、『無為の共同体』⁹の中で、共同体に関して特異性の共出現、移行、分有される過程を明らかにしている。やはり、ここで重要なのは、移行と分有の過程であろう。

⁸ 制度の可變的浸透性という用語、概念は平成 16-18 年度科学研究費補助金を受けた研究「グローバル時代における地方と制度」の議論から生まれた。

⁹ ナンシー（2003）『無為の共同体』以文社。